

Ⅱ 特別連載 Ⅱ

科学技術  
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第347回

### 神戸大学の活動報告



大西 洋  
(神戸大学  
理学研究科化学専攻  
教授)

### タイから招へい

## 先端材料研究インターンシップ

2023年1月22日～28日の7日間にわたってタンマサート大学シリントン国際工学部(タイ)から学生9名(学部生5・大学院修士学生4名・大学院博士学生1名)と教員1名を招へいして、神戸大学(兵庫県神戸市)で先端材料研究インターンシップを実施しました。



神戸大学理学研究科長(中央)を表敬訪問する招へい者一行

1992年に日本の経団連からの支援も得て設立されたシリントン国際工学部は、学部から大学院までのすべての授業を英語で行っています。ゆえに(タイから来た)留学生の比率が大きく、今回来訪した学生たちの国籍もタイ、ベトナム、インドネシア、スリランカ、カンボジアにわたります。引率教員はインド出身という多国籍訪問団となりました。COVID-19を経て留学生の受け入れを少しずつ再開していたが、まとまった人数の学生をインターンシップのために招へいするのは神

プログラムスケジュール	
1日目	関西空港到着 神戸市内ホテルに投宿
2日目	神戸大学内でキックオフ ミーティング 学生9名を受入研究室に 一人ずつ配属して 研究体験スタート
3日目 ～5日目	各研究室で研究体験
6日目	成果報告会と意見交換会
7日目	関西空港出発

戸大学にとって久しぶりのことでした。

今回のインターンシップでは理学研究科と工学研究科に属する化学、応用化学、生物化学、材料工学に関連した9つの研究室が招へい学生を1人ずつ5日間受け入れました。団体行動をあえて避け、光触媒・太陽電池・光化学・有機化学・合成高分子・分離膜・生細胞・アミロイドタンパク質・光療法(pho-  
todynamic therapy)という、それぞれ異なるトピックに単身で飛び込ませました。そのような環境のもとでこそ、受け入れ研究室の学生たちとの交流が密になり彼我の若者たち  
による刺激を与えたようです。

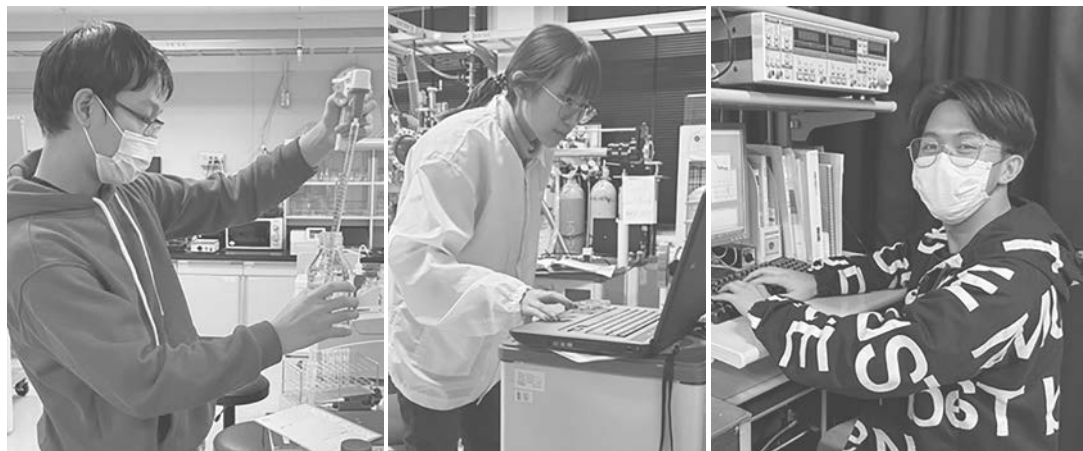
実質4日半のインターンシップでしたが、学業や英語能力をもとにタイ側が厳選した(倍率2倍)学生たちは、それぞれ大いに学び、たくさんの経験を積んでくれました。帰国前日にひとり10分ずつスクリーンを使って研究体験の内容を口頭発表させ、シリントン国際工学部の学生や教職員が参加できるようにオンラインでも配信しました。一人ひとりがTOEICなら「800～900点」を獲得する英語力を持ち、自学の授業で日常的に英語を使っている学生たちだけに質疑まで含めて堂々とした発表でした。

発表会に引き続き受入研究室の大学院生と教員、さらに受入に必要な諸般の業務を担った職員を交えて意見交換の機会を設けました。神戸が誇るスイーツのなかから、会計規定と予算の許す金額のものをセレクトして提供しました。南アジア出身の学生には成年に達しても飲酒しない人が多いので、茶菓による交歓は好評でした。

一行が神戸に滞在した一週間は10年に一度



成果発表会のあとで(右から2人目は大西教授)



学生9名を受入研究室に一人ずつ配属して研究体験。受入研究室でのヒトコマ

という寒気が日本列島をおおい、神戸市街地にある大学キャンパスでも3センチほど雪が積もる日がありました。西日本の各地で交通機関が乱れたことをご記憶の方もいらっしゃると思います。南国出身の学生たちには寒さに震えながらも、予想外の光景にとても喜んでいました。はじめて雪を見たのだから当然かもしれません。が、日本の小学生と同じようなはしゃぎようでした。このようなアクシデントにもかかわらず誰も体調を崩すことなく、全員を元気に帰国させることができ、ホスト役をつとめた神戸大学の教職員一同はほっとしています。学生9名を引率して来日したシリントン国際工学部のProf. Sandhya Babalによる尽力に感謝したいと思います。

今回のインターンシップはCOVID-19でいったん途絶えた対面での学生交流を復活させる機会となりました。シリントン国際工

学部出身者を科学研究費プロジェクトの博士研究員として採用した縁で、先方の学生10名を科学技術振興機構(JST)「さくらサイエンスプログラム」の支援のもとで2018年に受け入れました。それと同時に、神戸大学理学研究科と工学研究科はシリントン国際工学部と学生交換細則を含む交流協定を結びました。そして神戸の学部学生を夏休み期間の8月に先方へ派遣して英語でサイエンスを学ばせる活動を学内事業(神戸大学グローバルチャレンジプログラム)の一環として2019年にスタートさせました。さくらサイエンスプログラムから芽生えた「face to face」の信頼関係を双方向かつ定期的な交流へ育てていきます。一連の交流にかかわった担当者として、日本の大学も日常的な英語教育をもっと取り入れないとアジア出身の留学生を惹きつけることが早晩できなくなると強く思います。